

論文

皮革の流通

——福岡藩の皮革大坂廻送を中心として——

上田 武司

要約

江戸時代の物流にとって、瀬戸内海は非常に重要な航路であった。西日本各地から渡辺村に運ばれた皮革は、そのほとんどが瀬戸内海を通って運ばれた。福岡藩も牛馬皮革の売り捌きのためここを通って大坂に廻送し、渡辺村の皮革商人と取引をしていた。

その様子は、同藩御仕組革会所手代左平の万延元年時の「登坂日記」によって知ることができる。そこには、渡辺村を中心とする商談の舞台や廻送された皮革の流通、同村皮革問屋の果たした役割など、大坂での皮革をめぐる取引の実態が記録されている。

はじめに

なにわの海の時空館は、江戸時代の菱垣廻船を復元・展示し、港や海運の歴史をテーマとする博物館である。昨秋、こうした当館の主題である海運物流研究の一環として、パネル展示「皮革の流通——瀬戸内海を通る」を実

施した^①。

その概要は、次のとおりである。

①江戸時代の「摂津渡辺村が取り扱った皮革は年間総数万枚余」の根拠となる、大坂西町奉行阿部遠江守の「諸色取締方之儀」付奉伺候書付^二（天保一三年）で、代表的二〇項目の産物の一つとして、皮革が取り上げられていること。

- ② 西日本を中心とする江戸時代渡辺村の皮革取引の分布。
 - ③ 皮革の海道となった瀬戸内海航路。
 - ④ 具体的な取引事例として、福岡藩御仕組革会所手代左平の「登坂日記」から同藩の皮革大坂廻送と、渡辺村から薩摩藩知覧への獣骨の移出。
 - ⑤ 福岡藩の皮革大坂廻送のうち、筑前若松を出帆後大坂富島着船までと、大坂を舞台とする商談の経過。
 - ⑥ 渡辺村皮革問屋部屋六兵衛と薩摩藩知覧の海運業仲覚兵衛との獣骨の取引。
 - ⑦ 皮・革の違い、渡辺村の皮革流通における位置付けなどについて。
 - ⑧ まとめとして、諸国の台所としての江戸期の大阪において、皮革の取引は単にそれだけにとどまらず、産業連関的波及効果を発揮し、大坂経済に大きな役割を果たしたこと。
- 以上が展示の流れである。今回、本誌に寄稿の機会を与えられたので、このなかから特に、皮革等をめぐる交易の事例として、福岡藩の皮革大坂廻送について、その考察の過程を報告したいが、その前にまず、課題の認識を明らかにしておきたい。

江戸時代の物流にとって、瀬戸内海は非常に重要な航路であったため、様々な交易品がこのルートを通って運

ばれた。皮革等の流通にあってもその例外ではなく、福岡藩も専売にしていた牛馬皮革の売り捌きのため、同品をたびたび大坂に廻送し渡辺村の皮革商人と取引をしていた。

福岡藩の皮革大坂廻送の様子は、福岡部落史研究会編『松原革会所文書 第二巻』に収められている御仕組革会所手代左平の万延元（一八六〇）年時の「登坂日記」によって、知ることができる。これ以降この日記を中心に、同書中の他の記録内容も補いつつ考察を進めていきたいと考えているが、永尾正剛「福岡藩皮革の大坂廻送」〔部落解放史ふくおか〕創刊号所収）などによって、すでに当該日記が紹介されていることもあり、重複する部分は簡略化し、海運物流の観点に加え廻送先の大坂に焦点を絞り、大坂での商談の舞台設定と渡辺村皮革問屋の果たした役割など、大阪にとっても非常に興味深いテーマについて、その一端を明らかにしていきたい。

一 筑前若松出帆後、大坂富島着船まで

左平の「登坂日記」から、この間の状況を要約すると次のようになる。

福岡藩松原革会所に集められた牛馬皮革を満載し、同

所役人猪城仁三並びに手代左平と船頭与三郎その他の乗組員を乗せて、万延元年九月二五日の日和のなか、妙神丸は筑前若松を出帆した。福岡藩の傭船と考えられる同船の大きさについての記録はないが、他の例などから三〇〇石ないし四〇〇石、米換算で四五tから六〇t積ぐらい、当館展示の千石積級菱垣廻船浪華丸の約二〜三分の一ほどの船ではなかったかと考えている。

妙神丸はその日のうちに下関に着く。翌々日の九月二七日に同所を出帆し、中ノ関・上ノ関を経て、三〇日、室積に風待ちのため繫船する。同所の出帆は一〇月一日になる。三日の午後、多度津に着く。翌四日、猪城仁三は金毘羅・善通寺を参詣し、同日多度津を出帆する。しかしこれからは、風向・天候ともに悪く、ようやく八日に着いた明石でも同様の状態であった。

一〇月一〇日、左平はこの明石から陸路大坂をめざすこととなり、途次では名所見物も欠かさないが、翌一日昼ごろには大坂に着く。早速、福岡藩蔵屋敷に赴き、御金方牧武太夫並びに清水善蔵に手紙を届け、その夜は葉村屋吉兵衛方に泊まる。葉村屋の明確な場所の記載はない。後述のように妙神丸は富島一丁目の浜に着船するが、その夜、徒歩で富島から葉村屋に移動しているので、浜から余り遠くはない場所と想定できる。また同所は、

登坂の際の逗留場所となっている。言い換えれば、わざわざ場所を記録に残さないでもよいぐらい、近しい人物であったと考えている。

明けて一〇月一二日は、皮革の商況を調べるため所々を巡り、富島一丁目万屋平兵衛方にも行き、何か伝言をしている。一三日も同様に所々を巡り、薩摩藩蔵屋敷での虫払い場所借受の段取りを葉村屋と相談し、あとは堺屋林平という人にすべてを任せている。

妙神丸が安治川を通って富島に到着するのは一〇月五日となる。妙神丸到着の知らせを聞いて、左平は葉村屋と同道して富島へ行く。手回り道具などは伝馬船で葉村屋に送り、同時に着いた荷物は、翌一六日に古川ふじ屋の蔵を借り受けて入れる。荷物七六箇、はら皮六箇分四八枚との記述がある。富島の南側には古川という川があり同名の町もあったので、浜近くの蔵を借りたことになる。

1 妙神丸積荷の状況³⁾

万延元年の「登坂日記」における積荷に関する記述としては、妙神丸に積みがたい分、釜惣反古一八箇、奥御用蠟燭五〇箇、小倉神田屋作次郎船を雇い積み廻す、という内容と、富島着岸後、古川ふじ屋の蔵を借りて入れ

置いたもの、荷物七六箇及びはら皮六箇分四八枚、との記述しかない。これだけの内容では全体像を把握することが難しいので、同書に所収の他の記述内容もあわせて、積荷の状況を考えたい。

同書には、安政四（一八五七）年一〇月の送り状の写し⁽⁴⁾が掲載されている。大坂に廻送した妙神丸の船頭与三郎と葉村屋吉兵衛の両者が立会い確認した積荷の高が、福岡藩蔵屋敷の蔵元である炭屋彦五郎宛に報告されたものである。これを見ると次のような内容となっている。

筑前博多松原革会所分

滑牛皮式拾丸 革数四百枚、（滑）馬皮三拾四丸 同八百五拾枚、にへ拾四丸、細物馬爪入巻丸、嶋毛式枚、振毛牛尾巻丸、にへ振毛牛尾取合式丸、板目革式枚、メ七拾式枚（丸）、嶋毛式枚、板目革式枚

筑前木月革会所分

男牛皮廿八丸 但革数百六拾八枚、女牛皮式拾六丸 但革数式百三拾式枚、馬皮九丸 革数九拾枚、メ 六拾三丸 但革高四百九拾枚

牛馬皮革他の荷物を松原革会所及び木月革会所に分けて報告しているが、同年同月の日付となっているので、妙神丸の一航海の荷物であろう。挿入した（滑）は脱字、「七拾式枚」の枚は（丸）の誤記と考える。また丸は荷

造りの単位で、他の例によっても紙等は同単位で数えられている。大坂への廻船荷物のなかに、風袋^{ふうたい}・縄引と値引きの記載があるところから、縄で丸められた状態を指すのであろう。

これがどれぐらいの重量になるのか。同書中の安政三（一八五六）年のものと推定されている「御仕組革御益銀上納帳⁽⁵⁾」から、納められた皮革の重量が掲載されているものを抽出してみると、男牛皮一枚については、大小ばらつきはあるが、二七二例の平均値で一八・三斤⁽⁶⁾一一・〇kgとなっている。このうち「大坂登」と記載され、「家中売」の記載のないものが一五例あり、これだけでみると一枚あたりの平均で二〇・四斤⁽⁶⁾一一・二kgとやや重くなっている。

重皮・馬皮については、それぞれ一六五件と三三一件の事例がある。ただし、男牛皮のように「大坂登」の記載はなく、すべてが「家中売」となっている。このなかで、重皮一枚あたり代二貫五〇〇文、馬皮同一貫八〇〇文の事例が、八〇九割を超える割合で記されている。同書中「安政四年巳十二月大坂引合心得帳」に「元買定⁽⁶⁾」があり、男牛皮一斤に付き二〇〇文宛、女牛皮一枚に付き二貫五〇〇文宛、馬皮一枚に付き一貫八〇〇文宛の記事があり、納める際に何か標準的な重さの規格があった

のであろうか。

この他上納帳中には、馬皮について一枚二三斤、代四貫六〇〇文の事例が一つある。これを踏まえると一斤あたり二〇〇文となり、標準的な規格と考えられるものは、一枚あたり九斤となるが、これに比べると一枚二三斤の事例は非常に重い。そのために特記されたのであろうが、いずれにしても、この事例が残されているため、標準的な規格と考えられる重量が推定できることとなった。

この点、重皮についてはその重量がいま一つ明確ではない。そこでさらに、同書の「安政四年巳十一月播五太又両家革請取渡勘定帳」^⑦ならびに「安政四年巳十一月手ひかへ帳」^⑧によって、廻送された皮革で検討をすすめる。これによると、男牛皮は一枚約一〜一二kgとなっており、上納帳に記載された重量とはほぼ変わらない。ちなみに一丸単位で見ると、六枚一括り程度で重さ約六〇〜七〇kgとなっており、米俵一俵の重量とよく似たものとなっている。また、重皮で六〜一〇枚/丸、馬皮で一〇枚/丸となっている。

重皮では、太鼓屋又兵衛宛一一一枚・二〇二貫三〇〇目・丸数一一丸と、播磨屋五兵衛宛一一一枚・二〇七貫七〇〇目・丸数一一丸の二例がある。合計二二三枚・四一〇貫・丸数二二丸となり、一枚あたりの平均重量約一

貫八四七匁^⑨一一・五斤^⑩六・九kg、一丸あたり同一八貫六三六匁^⑪一一六・五斤^⑫六九・九kgとなる。この数字を「元買定」値と大坂売値とで比較し、これで割戻してみると、一斤あたりおおよそ代二五〇文となり、一枚あたり代二貫五〇〇文の重量としては一〇斤となる。

この他断片的ではあるが数字を拾ってみると、板目皮一枚で一五・四斤^⑬九・二kg、女牛皮一枚で八・四斤^⑭五・一kgの例がある。なお滑革^{ぬめがわ}では、牛滑革二〇枚/丸、馬滑革二五枚/丸の例がみられる。

以上、抽出した事例の平均値と標準的な規格の重量と考えられる数値を整理すると次のようになる。

	一枚あたり	一丸あたり	「元買定」値
男牛皮(平均)	一八・三斤一・〇kg	六枚六六・〇kg	二〇〇文/斤
重皮(平均)	一一・五斤六・九kg	八枚五五・二kg	
(規格)	一〇・〇斤六・〇kg		二五〇文/斤
馬皮(規格)	九・〇斤五・四kg	一〇枚五四・〇kg	二〇〇文/斤

輸出用長崎下りの棹銅も、一〇〇斤ずつすなわち六〇kgを木箱に詰め、大坂から長崎へ船で運ばれている^⑯。上記の皮革も一丸あたり六〇kg前後で、当時の人力による荷役形態を考えると米俵一俵六〇kgとして明治以降定められたように、荷造りの際の重さの目安として意識され

ていたのではないか。

仮に一九六〇kgで単純計算すると、安政四年一〇月の送り状に記載された荷物の重量はおおよそ八七になる。そこに混載の諸荷物が積まれ、船頭ほか乗組員と福岡藩の役人など、安政四年の登坂事例^⑧によると「乗合いの者七名」が起居を共にすることになる。また、万延元年時に古川ふじ屋の蔵に預けられた荷物七六箇及びはら皮六箇分四八枚は、そのすべてを皮革八二丸と仮定すると約五七の重さになる。

なお、先の上納帳によると、五月から九月にかけて男牛皮で二件、重皮で一一件、馬皮では一五件に「甘文塩代」などという記述が出てくる。时期的にもこれは当然のことながら、腐敗防止のために塩漬けた塩代をいうのである。「大坂登」の皮革と重なって記載されているものはないが、大坂廻送時の値引きの種類として、既述の縄引の他に毛引・塩引の事例が見られるので、積荷のなかに塩で腐敗を防いだものがあつたと考える。

明治期の資料^⑨に、「大阪皮革製造業」と題する報告書があり、このなかに「牛皮に生の外に塩漬と乾皮とあるよし前記せしが、塩漬乾皮共に腐敗を防ぎ保存に便にしたるものにて、塩漬は六七ヶ月又乾皮は虫害を予防すれば一ヶ年間貯蔵するを得べし。また、裏打の際生じたる

鏢^⑩は膠に製し、牛毛は下等毛布其の他の毛織物に製する等棄つべき所なし」との記述がある。これでも、妙神丸の航程は皮革の腐敗を避けるには十分な期間である。

2 筑前国「船宿」であつた万屋平兵衛

延享五(一七四八)年、大坂で板行された『改定増補難波丸綱目^⑪』をみると、「諸国問屋並びに船宿」という項目があり、当時の大坂で国問屋や船宿を営業していた諸商人の名前と所在地が記されている。重複する店もあるが、これによって問屋や船宿が国別に区分され、それぞれに取引の分野を持つていたことがわかる。

初版の延享五年版と、その後大幅改正された安永六(一七七七)年版を比べると、同項中、筑前国船宿は三軒が入れ替わっているが、万屋平兵衛の名は、同国船宿としてその両版に記載されている。ただし、延享版では「若松・黒崎 富嶋二丁メ 万屋平兵衛」とあつたものが、安永版では若松と黒崎の地名が削除されている。また、左平の日記には「富嶋一丁メ」と記されているが、本書では「富嶋二丁メ」として表記が一貫していることや、最も近い天保一〇(一八三九)年版でも、同日記とは二一年の開きがあるなどの差違はあるが、これらが同じ船

宿であることに支障はないと考えている。

なお富島一・二丁メは、現大阪市西区川口二・三丁目付近にあたり、大阪税関の富島出張所や大阪市港湾局の富島上屋うわやがあり、現在も富島という旧地名を冠した施設が存在する。この辺り一帯は『撰津名所図会』の「安治川橋」の図にも描かれたように、江戸時代の諸国の台所・大坂随一の船の出入りがあつた場所で、行きかう船の帆柱の数は、一目千本と謳われたところである。

『改定増補 難波丸綱目』延享五年版でみると、筑前国船宿は全部で五軒あり、各船宿名の上に、残嶋このしま・今津、残嶋・宮津、唐泊からどまりみやのうら・宮浦、姪濱めいのはま・博多、そして万屋平兵衛が若松及び黒崎と、それぞれ方面別の受け持ち区域と考えられる地名が記されている。これを考慮すると、福岡藩の蔵物を廻送する、筑前国若松を出帆した妙神丸与三郎船が大坂に入津する目的地は、富島の万屋平兵衛浜と定まっていたといえる。

江戸時代、諸藩は大坂に自らの土地や屋敷を所有できなかったため、各藩の蔵屋敷は大坂商人の名義となつていた。また、蔵屋敷には藩の蔵物の販売をさせる蔵元、代金の管理・運用にあたらせる掛屋という商人がいた。この他用達・用聞と呼ばれる商人まで、蔵屋敷に関わる商人は数多くいたが、船宿もまたその一角を形成するも

のであつた¹³。船宿は「元來荷物・船用品の周旋者で、錨・網・食料品を提供し、船に関する訴訟には船宿が代理人とな」り、また「町奉行所その他との船長船員との間に立ち、種々の行政的事務をなした¹⁴」のである。

この行政的事務であるが、船宿や船問屋は、人口調査・入出港の船や積荷と人員の調査など、現在の大坂港でいう港勢、港の勢いを表す資料の基礎調査を大坂町奉行所から命じられている。海運の発達した大坂第一番の受入れ口として、重宝されていたことがうかがえる。寛永一（一六三四）年付けの大坂の人口に関する記録が残されているが、その際、船宿・船問屋にもこの調査を命じたものがあるところから、江戸時代初期から、廻船の発達とともに必然的に起こつたもの¹⁵と考えられている。

二 大坂を舞台とする商談の経過

再度、左平の日記に戻り、大坂富島着船後の商談の経過を要約する。

妙神丸の富島到着の翌一六日には、左平が渡辺村に出向き、太鼓屋又兵衛、岸部屋吉五郎、岸部屋周次郎、大和屋又兵衛、播磨屋五兵衛、池田屋忠兵衛、明石屋伊左衛門、岸部屋九兵衛、播磨屋亀七、岸部屋平兵衛、以上

の人々に聞き合わせを行っている。一七日は猪城仁三が藩の蔵屋敷に出向いたり、左平はその供をして買物に行ったりして過ごすが、これ以降、商談の具体的なやりとりが、つぎのように続く。

1 大坂での商談日記

一〇月一八日 葉村屋同道で渡辺村に行き、皮革の値段（岸部屋吉五郎、岸部屋周次郎兩名の値付値段が記録されている）を聞き合わせ、相場を書き取る。

一九日 葉村屋に岸部屋九兵衛が訪れ「荷物一件委細相談」する。田原屋藤助来る。

二二日 牛馬皮の見立てに、岸部屋周次郎手代が来て、葉村屋同道で古川ふじ屋の蔵まで出かける。葉村屋同道で岸部屋周次郎方へ値決めに行く（値付値段の記録あり）。

二三日 太鼓屋又兵衛来る。相談して大要は聞くが取引にならず。猪城仁三、荷物売払い一件について意向伺いのため、藩蔵屋敷に出向く。

二四日 田原屋藤助、播磨屋五兵衛並びに岸部屋吉五郎手代来る。兩名牛馬皮見立て（値付値段の記録あり）。

二五日 田原屋藤助来る。太鼓屋又兵衛からの値付はな
いが、他よりの値入をみせてもらえば、高いかどうか

か助言するとのことで、蔵屋敷にいる猪城仁三に伝える。

二六日 太鼓屋又兵衛手代来る。荷物は上荷船で積廻す。猪城仁三の供をして、茶船で渡辺村へ荷物改めに行く。葉村屋同道。

二七日 太鼓屋又兵衛札に来る。

二八日 猪城仁三の供で蔵屋敷の牧武太夫・宗弥一郎に会う。牛馬皮値段合わせのため、牧武太夫が太鼓屋又兵衛に会いたい旨、手紙を出す。

二九日 播磨屋五兵衛来る。

一月一日 播磨屋五兵衛、牛皮一枚破断の手紙持参。
二日 播磨屋五兵衛と相談し、太鼓屋又兵衛を呼ぶ。夜来る。

三日 播磨屋五兵衛・太鼓屋又兵衛の使い来る。

四日 太鼓屋吉三郎仕切り下地書持参。

以上が、渡辺村の皮革商人たちとの商談並びに往来のあらましである。商談の最終的な結果は定かではないが、少なくとも太鼓屋又兵衛宛には荷物を上荷船で積廻し、買入値段を記した仕切書の下書きを持参している。また、福岡藩の方には、葉村屋吉兵衛と田原屋藤助という二人の商人の関わりをみる事ができる。逗留場所となって

いる葉村屋はどこへ行くのにも同道し、田原屋は値段の高低について助言をしようと伝えている。しかし、両人がどのような立場の人たちであったかは記載がない。

2 上荷船業を営んでいた葉村屋吉兵衛

左平の日記によって、大坂での商談の舞台がどのような位置関係にあったかを知るためには、葉村屋吉兵衛がどこで、どのような業を営んでいた人物であったかを確かめることが重要である。それを知る資料として、堺古文書研究会編『大阪市中の上荷船・茶船』がある。

そのなかに、大坂の上荷船業者と尼ヶ崎の渡海船業者たちが、争論に及んだ事件があり、寛政一〇（一七九八）年七月付けで、大坂町奉行所が行った裁きの内容を承知する旨の文書の写し¹⁷が掲載され、上荷船側の当事者の一人として「舟町浜 葉村屋吉兵衛」の所在地と名前が記載されている。また、同年一二月付けの上荷船組合同士の申し合わせ¹⁸では、一方の当事者の証人としても同人の所在地と名前が掲載されている。左平の日記の万延元年とは六二年の開きがあり、同一人物とは必ずしも言えないが、代々家業とその名を引き継いでいたのであろう。

舟町は、現大阪市西区土佐堀一丁目及び江戸堀一丁目にあたり、現在よりは上流にあった筑前橋を北に渡ると、

左前方に福岡藩の蔵屋敷が見えることになる。この町は「七ヶ村ノ上荷船茶船ノ船夫等、所謂落橋小渡シ等ノ公役二服シテ其運上銀ヲ免ゼラレシガ、是二到リテ更ニ極印ヲ受ケ、組頭ヲ設ケテ其業ヲ営ム」とあるように、元和五（一六一九）年に上荷船の営業が公認された七村（舟町、川崎、天満三軒家、過書町、福島、野田、伝法の各所）の一つであり、江戸時代を通じて、本船と市中各所間の運送を独占していた上荷船業の一地域にあたる。

また、船町の浜といえは、土佐堀川に面した通り一つ南側の西横堀川沿いの場所（現西区江戸堀一丁目・阪神高速道路環状線土佐堀出口付近）以外になく、ここで葉村屋が上荷船業を営んでいたものと想定できる。それ故、渡辺村の太鼓屋又兵衛宛積荷を運んだ上荷船は彼の船であり、猪城仁三を送った茶船¹⁹も彼の手配するところのものではなかったかと考えている。

葉村屋吉兵衛の名は、既述のように、安政四年一〇月付けの福岡藩蔵元炭屋彦五郎宛送り状の写しのなかで、着荷確認の立会人として登場している。大坂の十人両替商の一人で鴻池屋と並ぶ大商人であり、同藩の蔵物を取り仕切る蔵元である炭屋彦五郎宛に、筑前国から廻送してきた妙神丸船頭与三郎と、これを受け取り市中の河川を運送する上荷船業を営む葉村屋吉兵衛の両名が立会人

となつて、送り状が出されている。これによれば、太鼓屋又兵衛・播磨屋五兵衛宛に積荷を積廻すことになつて来たようであるが、こうした段取りを考えると、同業を営んでいた彼の役割や関わり方がよく理解できる。

3 安治川で時化にあい、助けられた船頭与三郎

つぎに、大坂町奉行所から発せられた御触・口達の場合に、弘化三（一八四六）年一月に「難船助け遣わし候に付き、夫々御褒美下され候事」として、源七ほか一四人の上荷船乗りの人々が、安治川口において「筑前国岩屋浦直乗船頭与三郎加子四人乗廻船」の危難を助けたことが残されているので、これに少し触れたい。

江戸時代の大坂入津の航路は、安治川口及び木津川口であった。万延元年時の妙神丸も安治川口から富島の浜に着き、木津川口から帰路に着いたものと考えている。大坂町奉行所では、両川口付近の上荷船の者に命じて「船破損の時は油断することなく上荷船を出し、人を助け荷物を取り上げ荷主に返す²¹」ようにしていた。これも上荷船が独占的に業を営むことができた公役の一つで、町奉行所としても、非常時の体勢を整えることにより諸国の船が安心して入津でき、ひいては大坂の繁栄にもつながると考えていた。

この口達に残された「筑前国岩屋浦直乗船頭与三郎加子四人乗廻船」とは、すなわち、筑前国岩屋浦の船の持ち主であり船頭でもある与三郎と乗組員四人乗りの廻船との意味で、彼らが救助された旨の記載であった。万延元年の日記では、船頭与三郎をはじめ「妙神丸若者作次・甚三」「カシキ幸七」の名がみえる。岩屋浦の所在地は、現北九州市若松区である。

万延元年と弘化三年とでは一四年の差があるが、一人の一代としては十分であり、場所も名前も一致する。同一人物であったとすれば、与三郎の足跡とともに、妙神丸が富島の浜に着岸した意味がよく理解できる。

4 皮革取引の舞台設定

次頁に掲載した写真は、当館に展示している江戸時代後期の大阪の港の様子を再現したジオラマで、天保一〇（一八三九）年に製作された当館蔵の『大阪湊口新田細見図』を基に作成している。

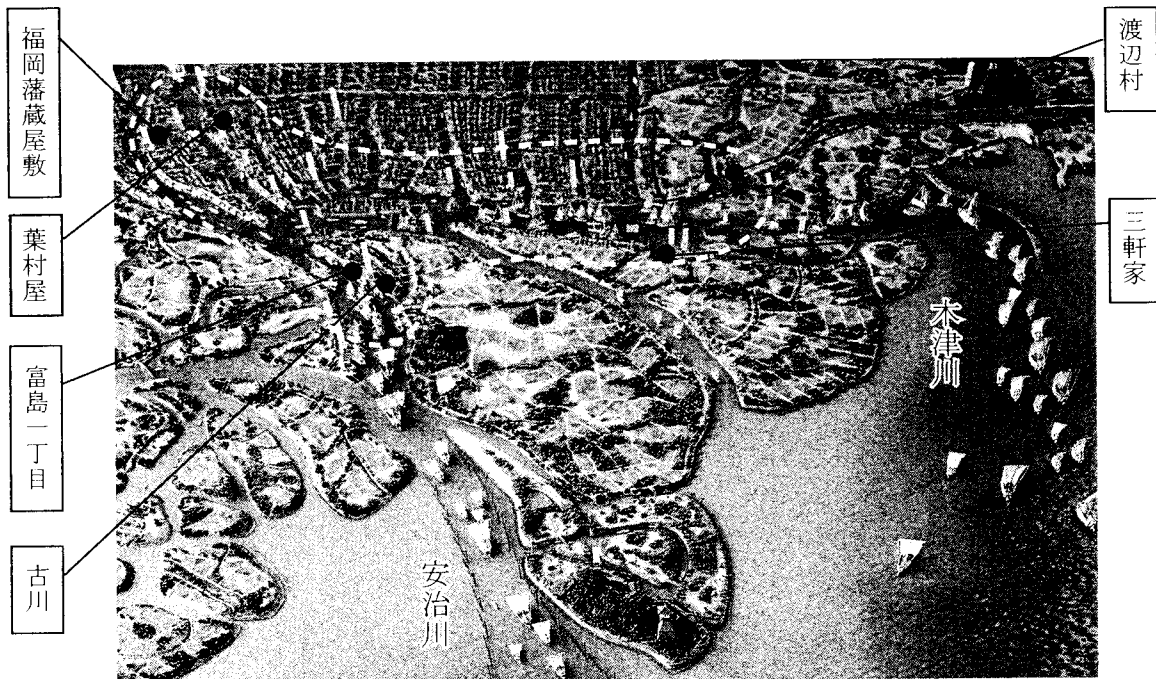
ここに、皮革取引の舞台となる、それぞれの場所を記してみた。筑前国岩屋浦の船頭与三郎が、福岡藩の蔵物である皮革とそれに付添ってきた猪城仁三を乗せて、現大阪市西区川口二・三丁目付近にあった富島一丁目万屋平兵衛浜に着岸したのは、一〇月一五日であった。先に

大坂に着いていた左平と葉村屋吉兵衛が、この浜に出迎えた。その夜、富島から陸路を徒歩で、これも現西区江戸堀一丁目付近にあった葉村屋吉兵衛宅まで行っている。今の西区内をほぼ西の端から東の端まで歩くことになるが、それでも一時間もあれば十分到達できる距離であろう。なお、翌一六日に積荷を預けたふじ屋の蔵の場所は、富島のすぐ南側を流れる古川を渡ったところである。

この葉村屋吉兵衛宅と、現北区中之島三丁目の関電本社ビル付近にあったであろう福岡藩蔵屋敷とは、当時の筑前橋を渡れば、片道徒歩一〇数分程度で行き来できる距離である。ここから中之島沿いに土佐堀川を抜けると富島であり、その手前を南に曲がって木津川を下り、さらに十三間川じゅうさんげんに入るとすぐ渡辺村である。この間の距離は七km程度である。交通手段は、福岡藩の役人が利用した一〇石積の茶船や皮革を搬送した二〇石積の上荷船となる。

5 皮革取引の概要

妙神丸が万屋平兵衛浜に着岸した翌日、まずは渡辺村への聞き合わせが行われるが、この後すぐ同村皮革商人たちの値入が始まっている。通常、海上輸送によって大



商談の舞台 ○内は、商談の舞台（推定）

坂に廻送された産物は、国問屋または船問屋とも呼ばれる「何分かの手数料を受けて」「特定地方の商品を総括的に取り扱う委託販売問屋」⁽²²⁾によって、大坂での流通が始まる。

しかも国問屋は、本来の受託売買のみならず「倉庫業又は金融業を兼ね」⁽²³⁾ていた。このため、葉村屋吉兵衛や田原屋藤助・古川ふじ屋のなかにこうした機能を持つ者がいるのではないかと考えていた。しかし、葉村屋は上荷船業を営む人物で、入津した皮革を渡辺村に積廻す仕事をやっており、ふじ屋については蔵を借りたこと以上の記述はない。わずかに、田原屋が値段の助言をするところだけで、日記を見る限り、受託先としての機能を發揮している者はみられない。

当時の蔵物を売り捌く流れとして「生産者―産物会所―蔵屋敷―立入札商人（問屋）―仲買―小売」⁽²⁴⁾というルートが考えられている。「立入」または「御館入」商人、すなわち蔵屋敷に出入りする商人が入札を行って売り捌かれていく。これで見ると、現に入札を行っているのは渡辺村の皮革商人たちであり、皮革に関しては、彼らがこの機能を担っていたものという他はない。日記中にその結果は記載されていないが、一〇月二十八日付けの項に、牛馬皮値段合わせのため、蔵屋敷の牧武太夫が太鼓屋又

兵衛に会いたいとの手紙を出したことも記されている。

この理由は、牛馬等の皮革を扱うことができるのは、元和年間（一六一五―一六二三）に和漢革問屋の免許が与えられたといわれる、渡辺村の皮革問屋だけであったということであろう。渡辺村の皮革問屋は、他にはない有効な流通ルートを持ち、大坂に廻送される皮革を取り扱っていた。阿部遠江守の書付にある、鹿皮は白革師仲間が一手に引き受けるが、その他の諸皮については、渡辺村が引き受けるとの言葉を裏付けている。渡辺村の皮革問屋は委託販売を前提とはせず、売買や加工販売取引を行う専門問屋⁽²⁵⁾として、福岡藩と皮革の取引を行ったと考える。

また、蔵物の売買にあたっては、まず入津量の三割程度を蔵屋敷で入札させ、この落札価格（「御定め直」）を基準に、残りのものを問屋に販売させていた。このやり方は専売実施後さらに頻繁となり、砂糖・毛綿・皮革などの蔵物にみられたと言われている。廻送した皮革の取引がすべて終了したとの明確な記述がないなかで、左平たちが帰路に着いた理由として、こうした背景を考えるとわかりやすい。

さて、渡辺村の皮革商人たちが入札した皮革の値段が、どのような水準であったのかをみると、例えば、播磨屋

五兵衛の見立値段は、男牛一貫目につき銀二六匁五分、女牛同三五匁五分、馬一枚につき同五〇匁で、岸部屋吉五郎のそれは、それぞれ二六匁、三五匁、五一匁となっている。これらを先の「元買定」値と比較してみると、次のようになる。

	播五	岸吉	「元買定」値
男牛皮一貫目	二六匁五分	二六匁	一八匁七分五厘
女牛皮一貫目	三五匁五分	三五匁	二三匁四分四厘
馬皮一枚	五〇匁	五一匁	二七匁

すなわち「元買定」値に比し、男牛皮で約四割増し、女牛皮で約五割増し、馬皮で約九割増しの値付が行われている。これに比べ、先にあげた上納帳の「家中売」の値段は、重皮・馬皮などはほぼ倍もしくはそれ以上であり、大坂での売値より高くなっている。これは、大坂へ品物を送らず地元で直接売り捌くため、大坂での諸品の不融通と値段の高騰を招いている、と阿部遠江守が書付のなかで述べた実態を示すと同時に、それでもなお大量に売り捌くためには、全国市場である大坂の渡辺村の皮革商人たちとの取引が欠かせない、という両面を表すものと考ええる。

なお江戸時代を通じて、商工業者が同業組合を結成し、営業の独占を図る株仲間の制度があったが、当時の大坂での物流を考えるうえで、この制度は重要な意味を持っている。上述の各種問屋や仲買も、そして上荷船や茶船もその例外ではない。特に、本論で主たるテーマとしている西国からの廻荷については、大坂の間屋は「脇浜に陸揚げせしめず、必ず大坂にて水揚げせしめ、その手を以て分散配給せしめ得る伝統的な特権を有していた」といわれ、こうした枠組みのなかで、各種産物の流通が規定されていた。

株仲間の制度は、天保の改革期を除き、江戸時代を通じて比較的長く継続されていた。それぞれ組合・仲間の努力とともに、その根底には運上銀などが入る、様々な公的業務を課せられるという役所側の思惑と、阿部遠江守の書付にもあるように、セリ売買などは値段が上がるもとで、こうした枠組みで安定的に売買されることにより、物価の安定も図ることができるとの考え方があったのであろう。

三 妙神丸の出帆

こうして、左平たちは大坂をあとにする。妙神丸は停

泊していた富島一丁目万屋平兵衛浜から、安治川三丁目下に繫船し直されたのであるが、ここでは出船に不自由であるとしてさらに三軒家まで移され、恐らくは木津川を通過して、一月一四日に出船する。帰り荷の中には、左平たちが商談の合間に大坂市中を歩き回って買い求めた、郷里の人々からの頼まれ物もあった。

1 妙神丸大坂出帆時の回航路

妙神丸は大坂出帆の前に、富島の万屋平兵衛浜から安治川三丁目下に繫ぎ替えられ、さらに「爰元にては出船の折自由あしきに付き」、三軒屋まで回航されている。富島浜から川向かいの安治川丁まで移したが、多くの船が停泊しているため、出船しづらい状況があったのであろう。

大坂は川口の港であるため、浅瀬が多く浚渫しゅんせつもたびたび行われていた。そのため、安治川・木津川両川口には、航路を示す水尾木みおぎが打ち並べられていた。それ故、この回航の航路については、安治川から木津川へ抜け、一旦三軒屋に繫いだうえ出帆したものと考えているが、それには、安治川橋と亀井橋をくぐらなければならぬ。

まずは物理的なこととして、帆柱を立てたままの航行が可能であったかどうか、などの疑問が残る。比較的小

型の船のなかには、帆柱を倒して上流の方まで入っているものもあるが、特定できるだけの資料はない。たとえば妙神丸の寸法や橋の桁下の高さなど、それを検証する記録が見つけられないことや、今回の目的に照らして、これ以上の疑問の解決は別の機会としたい。

2 皮革の廻荷と帰り荷

福岡藩から皮革とともにやって来た人たちは、船旅や商談の合間に名所見物にでかけているが、それ以上に買物にも出ている。郷里を出発するに際して、大坂での買物を頼まれた物もある。市中を歩いては買い求めた品物の名前が、同じ日記に残されている。たとえば、お茶は西横堀の嘉来園、絹糸類は本町の阿波嘉、筆筒類たんすはあみだ池のならや忠兵衛、という具合である。

江戸時代の大坂では『浪華買物独案内』等と名付けられた書物が、種々出版されている。たとえば、文政七（一八二四）年及び天保三（一八三二）年に前後編が出版された同種①のものをみると、船場・島之内を中心に天満・上町等を含めて、掲載されているものだけでも二五〇〇店舗以上にのぼっている。

猪城仁三や左平が買い求めた品々を取り扱う店も当然ある。また、彼らが大坂に運んで来た皮革は、太鼓、雪

駄やたばこ入れ、足袋や鼻緒、武具や馬具等に加工され、これらの商品を商う店も数多くみられる。この他、琴や三味線、角製印鑑の店名も掲載されている。なかには牛の内臓や肉を薬として商う店もあり、近ごろ類似品が出回っている、と注意書きを掲載しているところもある。

阿部遠江守の言葉を借りると、大坂は江戸期を通じて諸国の台所であった。各地の産物は、大坂の商人が扱い、職人たちが加工を加え、江戸をはじめ諸国に移出される。しかし、物は決してそれだけで動くわけではなく、必ず人の動きが伴い、人が動けばさらに情報がもたらされる。一つの取引は次の取引を生み、大坂の経済は次々と循環していく。

おわりに

報告は以上のとおりであるが、課題とした大坂での商談の舞台設定と渡辺村皮革問屋の果たした役割については、一定明らかにすることができたと考える。ただ、瀬戸内海を通じて廻送される皮革は他の例も数多く報告されており、その意味では、今回の事例はその一つであること、渡辺村からはさらに複雑な皮革の流通網が張り巡らされていたであろうことなど、まだまだ多く今後の課

題が存在する。

さて、こうした一連の調査を通じて考えることは、江戸期の大坂が思っていた以上に豊かな内容を持っていたということであり、それとともに、渡辺村の皮革商人たちが広範な商業活動を行っていたことである。福岡藩の例は、大坂廻送時のことであるが、逆に渡辺村の皮革商人たちが西国各藩に買付に出向いている事例も数多く報告され、江戸時代を通じて渡辺村は皮革流通の中心地であったことが実感できる。当時の大坂経済を支えたものは、西廻り航路を大動脈としていくつかの要因があるが、皮革等交易の役割は大きいと言える。

江戸時代末に描かれた『大坂名所一覽』の構図は、大坂を東から西に鳥瞰したものとなっており、これまで報告させていただいた渡辺村の、そして大坂の立地を象徴的に表したものとなっている。明石海峡を通じて西に向かう眺めは、瀬戸内海を通じた交易のルートをまさに表すものであった。

註

(1) 本展示にあたっては、阿南重幸「江戸期 皮流通と大坂商人―長崎・府内・小倉・筑前・対馬・大坂」(第八回全国部落史研究交流会レジュメ、二〇〇二年八月一

日)、勝男義行「領国を越えた関西の皮革業―渡辺村の皮問屋の活動を中心に」(同上)、坂元恒太「火山灰台地における農業革命―知覧の海運商人仲覚兵衛と骨粉肥料―」、中尾健次「大阪・渡辺村と皮革産業」(太田恭治・中島順子・山下美也子編著『学習ガイドブック』所収)を参照した(本論に関わるものはつぎに記す)。

- (2) 福岡部落史研究会編『松原革会所文書 第二巻』(一九九三年)に収められている万延元年時の「登坂日記」は、同書四〇四頁の「登坂日記」と同四二二頁の「登坂諸日記」^并注文物指引控帳」の二種類があるが、同書のあとがきによると、後者は前者の内容を整理したものと判断されている。今回の報告は、その両者を比較しながら概要を把握したものである。以下同じ。

- (3) のびしようじ「松原革会所についての二、三の問題」(『部落解放史ふくおか』六六号、一九九二年)では、上納帳の性格が詳しく分析されるなど、この項を考えるにあたって、種々参考にさせていただいた。

- (4) 前掲『松原革会所文書 第二巻』三三三頁。
 (5) 同前一頁。
 (6) 同前三九一頁。
 (7) 同前三六六頁。
 (8) 同前三七七頁。

- (9) 大阪歴史博物館図録『特別展よみがえる銅』、二〇〇三年、八八頁。
あかがね

- (10) 前掲『松原革会所文書 第二巻』三三三頁。

- (11) 大阪商工会議所編『大阪商業史資料 第三十巻』、一九六四年、三〇―三二二頁。明治三二(一八九九)年に当時の大阪商業会議所が企画し、大阪の商業沿革史について史料調査を行いまとめたものである。(原文片仮名)

- (12) 本書によると、板行当時の大坂の状況が詳しく記され、数多くの諸商人の所在地や名前を知ることができる。板行されて以降、安永六(一七七七)年に大幅改正されるなど、天保一〇(一八三九)年版まで七回の板行と改定が行われている。この間の経緯・内容の異同については、多治比郁夫・日野竜夫編輯、野間光辰監修『校本難波丸綱目』に延享版および安永版の印影版が採録されるなど詳しい。なお、原本の確認は、志田垣与助編・画『難波丸綱目』享和版によっている。

- (13) 宮本又次「大阪の蔵屋敷と御館入」(宮本又次編『大阪の研究 第4巻 蔵屋敷の研究・鴻池家の研究』一九七〇年)一〇九頁。

- (14) 同前、一二二頁。

- (15) 中之島尋常小学校創立六十五周年中之島幼稚園創立五十周年記念会編『中之嶋誌』一九七四年、五二六頁。

- (16) 江戸末期の大坂で上荷船業を営んでいた、高麗家の文書が残されている。堺古文書研究会編『大阪市の中の上荷船・茶船』(一九九六年)は、これが解読され出版されたものである。
- (17) 同前、五八頁。
- (18) 同前、一三九頁。
- (19) 大阪市立中央図書館市史編集室編『大阪編年史 第四卷』一九六八年、四三一頁。
- (20) 大阪市役所蔵版『大阪市史 第四下』一九一三年、一八〇七頁。
- (21) 大阪市役所蔵版『大阪市史 第五』一九一一年、三〇七頁。
- (22) 大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成 第十卷』一九七七年、五八一頁。
- (23) 大阪市役所編纂『明治大正大阪市史 第一卷』一九三四年、一九五頁。
- (24) 宮本又次『日本近世間屋制の研究』一九七一年、一八五頁。
- (25) 宮本前掲「大阪の蔵屋敷と御館入」一一二頁。
- (26) 「浪速部落の歴史」編纂委員会編『渡辺・西浜・浪速』一九九七年、二七頁。
- (27) 前掲『大阪市史 第五』六三九頁。書付の引用は原文

ではなく、その意を記している。他の箇所も同じ。

- (28) 前掲『大阪経済史料集成 第十卷』五八一頁。
- (29) 宮本前掲「大阪の蔵屋敷と御館入」一五二頁。
- (30) 宮本前掲『日本近世間屋制の研究』一四三頁。
- (31) 大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成 第十一卷』一九七七年、二二六頁。

付記 一つの区切りとして報告させていただいたこの内容は、昨秋に実施したパネル展示に始まり、本年一月の(社)部落解放・人権研究所の歴史部会での報告を基にするものである。

この間、同歴史部会部会長で大阪教育大学の中尾健次教授には貴重なご教示をいただき、部落解放同盟浪速支部の米田弘毅書記次長、渡邊実文化部長には種々相談にのっていただき、(社)福岡県人権研究所の竹森健二郎主任研究員、ミュージアム知覧の坂元恒太学芸員にはお忙しいなか資料提供のご無理を願った。誌面をお借りしてお礼を申しあげたい。